
ハッピーウェディング

Wanda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーウェディング

【Nコード】

N1652S

【作者名】

Wanda

【あらすじ】

女子大生と神さまの漫才。

背景に日本の思想みたいなものを散りばめています。

美子の家はおかしい。いや、もめごとが多いという意味ではなく、家そのものがおかしい。

ラップ音は年中鳴り響き、目の前を白い人影が横切り、特定の部屋で眠った日にはお腹の上で手乗りサイズの老人が舞い踊る。盆になるとあちらこちらで話し声がし、ふすまを引いても当たり前のように人は居ない。

たつぷりありそうないわくは誰も調べたがらず、皆が皆「そういうもの」だと諦めきって普通に生活を送っている。おかげで、そう不便な場所でもないのに親戚は盆と正月にしか来ず、何か行事がある時にも、打ち合わせは大抵は違う誰かの家で済ませてしまっていた。

そんな家に二週間も独りになるのだ、きっと何か起こるだろうと覚悟はしていた。しかし、まさかこんな事態が押しかけて来るなどと、さすがに想像できていなかった。

玉露を要求した幼女の前に、パックで淹れたお茶をどんと置く。そんな名前しか聞いたことのない物がこの家にある訳がないのに、四、五歳くらいのおどけない顔をした幼女は薄い眉をつと細める。

「ぬしは、守り神たるわらわにこんな粗茶を飲めと言うか？」

「わらわって。わらわって」

「いつきの家も落ちたもののよ。そんな風だから、一代のうちに周囲の土地を皆まき上げられたのじゃ」

頭を抱える美子の向かいで、テーブルについた幼女は祖父がボケた後もうめいていたことをずばり言う。その、リフォームした台所とまったく合っていない和装をちらちら見ていると、幼女はにいと口元をゆがめた。

「この家に育ったんじゃ、わらわが特別な存在であることくらい分

かつておろう。久々に生まれた女兒だというに、なんとしつけのなっていないことか」

ああ嘆かわしいと頭を振るのに合わせて、後ろでくくった黒髪がさらさら揺れる。どこまでもババくさい幼女へ、美子も目をすがめて反論にかかった。

「わたしお姉ちゃん居るんだけど。二人も」

そして男を期待していた時にまた生まれた女だと言われ続けた彼女は、すっかりやさぐれた性格になっていた。何をしても上の二人と比べられ、勉学の末に入った今の大学も「お姉ちゃんたちがいいところに行けてるんだから、当然でしょう」という目で見られる。

就職や進学に合わせて出て行った二人を思い浮かべ、知らないうちにひん曲がっていた口を引き締め直していると、幼女がこちらを見据えて言う。

「しかしここ三代ほどは、男しか生まれておらんかったろう。いつきの家はフジヨ、ハライメの家だ。久々に続いた女兒の三人目でミコ。完璧ではないかえ？」

口元へ手を持っていった拍子に、やわらかそうな袖がさらりと揺れる。模様が織り込まれた白い布の向こうで、薄い唇がまた笑った。迷子だと思つて保護した時は確かに洋服を着ていたそれが身につけている所作に、内心舌を巻きつつも、訳の分からない言葉にはきつちり反論する。

「ごめん、何が言いたいか分かんない。この名前に何か意味があるの？ それに、うちはイツキじゃなくて斎藤なんだけど」

三子はさすがにかわいそうだからと付けられた名を好きになれるはずもなく、彼女は子どもの頃から常に名字の斎藤で呼ぶよう周囲に強要して来た。おかげで中学のあだ名がマサイになったが、それでも美子よりはましだった。

いいやと目を閉じて首を振り、幼女は言う。

「三は完璧な数字だし、ミコは神の花嫁たる巫女と音が同じじゃろ。それに斎藤のサイはイツキという漢字だろう？ まつりごとを行う

者、そのものを指す言葉だ」

言われて漢字をテーブルの天板に書き、そういえば葬式とかやる斎場ってこんな字を書くっけと思ひ出す。しかしここ数十年、地元のお祭りにも名前を出しているだけで、一家の誰も密には関わっていないはずだ。……それもまさか、ずっと女が生まれなかったことが関係しているのだろうか。

この辺りにずっと住んでいるはずなのに、言われてみればおかしいことだ。思わず口をつぐむ前で、幼女はやわらかく笑う。

「ぬしの母が気まぐれでわらわの社を世話してくれたため、またこうして表に出てくることができた。それはとても感謝している」

「お母さん、細々したことするの好きだからね。でもそれだったらお母さんに直接お礼言えいいじゃない。今日から旅行行っちゃったよ？」

今年定年の父に、二週間かけてのヨーロッパ一周旅行を提案したのは上の方の姉だ。言い出しっぺが気に食わなかったが、かと言って自分ひとりでプレゼントできる物も思いつかなかったため、話に乗っていくらかお金を出していた。

広い家を独占できる喜びにひたる美子の元へ自称守り神が来たのは、日頃家族を嫌いまくっている罰なのだろうか。いやそんな訳ないと首を振る前で、幼女もまた同じ仕草をゆったりと取る。

「いや、結子はわらわのことはまったく見えておらん。ぬしの父である慎一郎もだ」

「うちの親呼び捨てにしないだよ」

なんとなくム力つくという苦情を華麗にスルーして、幼女は軽く身を乗り出す。しかし、その小ささで大人用の椅子に座っていて、よく疲れないものだ。

「そこで、わらわが見え、ミコでもあるぬしに、ひとつ提案があるのだ」

「何」

感心のような呆れのようなことを考える前で、相手もまた企みを

持つ者の表情を取る。椅子の上で身を引くと同時に、突拍子も無いことを言われた。

「美子よ、結婚せんか」

「……は？ けっこん、結婚？ 誰と、なんでわたしが」

疑問にはすぐ答えずに、幼女は何やら語りモードへ入って行く。これは長くなるなと悟った美子は、そつと煎茶の入った湯呑みを引き寄せた。

「この家はのう、百年に一度、女兒を神に嫁がすことによって代々の守護を強力にしてきたのじゃ」

「え、かみ？」

「しかし百年前は男児しかおらず、分家から迎えた女兒もやはりその血の薄さゆえにか、夫となる神から氣に入られることはなかった」
「かみつて神さま？」

「この家が没落したのは、純粹にぬしの曾祖父や祖父の手腕だ。しかし、その際に神に嫁いだ者がおれば、ここまで貧乏になることはなかったかもしれぬ」

「貧乏じゃないから！」

しかし父はサラリーマンで母はパートタイマーとくれば、格別裕福とも言えない。更に家が無駄に古く無駄に広いため、ほかのご家庭よりも維持費は掛かっていると思われた。

「幸いにも我らの仲間には、いまだいつきの家を覚えていた者もおつてな。三人姉妹、特にミコの名を持つぬしは注目の的だ」

「ええっ」

いつの間になんな怪しい存在から目を付けられていたのだろうか。自分の肩を抱いて台所を見回していると、幼女はどこから取り出した紙切れをテーブルの上へ順に並べ始めた。

「何それ。お札？」

表に墨で文字が書いていなければ、サイズから一筆箋だと思っただろう。その文字も崩し過ぎていて何を書いたものなのかさっぱり読み取れず、今さっきの疑問の答えを求めて顔を上げる。

「うむ。せっかくだからわらわがよさそうなのを選別してみたのじや」

まさか本当に、カミとの見合いを進めるつもりなのか。

「こついうのって普通写真じゃあ」

「わらわのような存在は写真に写らん者が多いんじゃない。言わせるな恥ずか」

言い終わらないうちから手を伸ばし、一枚に触れた途端電気のよなものが走って仰天する。

「うおおおおおおお！？」

おっさんのような悲鳴を上げ、椅子から飛び跳ねるとそのまま数歩走って逃げた。身を縮こめながら遠巻きにしていると、幼女が目をすがめて言う。

「札は神そのものだ。嫁候補にいきなり触られた日には、照れて跳ね除けもするだろうよ」

「いや、あの」

どう突っ込めばいいのか言葉を探すうちに、幼女がまた袖を口元にやりふふふと笑う。

「皆、血統書つきの娘ならば容姿に関係なく大歓迎じゃ。生け贄は通常美女が好まれるが、まあこの場合は妥協してくれるはずよ」

「何かすごい悪意を感じるんだけど」

「気のせいだろう」

生け贄って何本当のこと言ってるのと息を吐き、のろのろ動いて椅子に座り直す。どうせ化粧映えないこの顔は塗りたくったところで十人並だよ、と口には出さず視線だけをあっちにそらした。

並べられた札を順に読み上げた幼女は、こちらをまっすぐに見据えて来る。ちりちり掛かる圧力に負け、向き直ると淡々と言われる。「祀ってしまえばパソコンでも神だが、今回選別したのは皆九十九歳以上じゃ」

「つくも神ってこと？」

「それ以外もあるよ。皆それなりに力は持つとるゆえ、安心して嫁

に行くといい」

「いや、行かないから」

彼氏も夫も人間がいい、人間しか考えられないし、それに、

「ロリコンばっかじゃん」

経た年数から即座に思いついたことを、そのまま口に出してお札をにらむようにする。年上は嫌いじゃないが、離れ過ぎている相手はジェネレーションギャップで苦しみそうなので、できれば五歳以内が望ましかった。

いやそれ以前の問題だと首を振る前で、幼女が玄関先で会った時と同じような子どもらしい明るい笑い方をする。

「まあそう言うでない。女子（笑）が好きなイケメン（笑）揃いぞ？」

「何かものすごい悪意を感じるんだけど」

「気のせいだろう」

成人しても女子は使っていないんだぞとにらみ付け、いくら言ってもなくならない文句をまた一つぶつける。

「イケメンって、どうせイケメンに化けてるだけなんですよ？」

「まさにその通り。よく知っておるな」

美男美女に化けて人間をたぶらかすのは、古今東西の化け物が得意とすることだ。しかも異類婚ネタは、女が異形に嫁ぐ方が悲惨な結末になることが多いと決まっている。

「お断りします。お引き取りください。家に帰れ」

立ち上がり、勝手口の戸を開けて庭の角にある古い社を示す。まだ冷たい風が吹きこみ体が冷えたが、それよりはこれを追い出す方が先決だ。

目をすがめてにらみ付けるこちらを、あざわらう声で幼女は言う。「残念ながら、わらわのような存在は、一度招き入れたら追い出したところで出入り自由なのだよ。わらわは滅びぬ。何度でもよみがえるさ」

「どこで覚えたの、それ……」

「中に入れて欲しいと張り付いていたその窓辺で」

「ひいいい」

指差した高い位置にある窓を見て何その怪談と頭を抱え、その場でへたりこんでいると音もなく幼女が近寄ってくる。冷えるぞと扉を閉じ、目の前に膝を下ろしそのまま正座をした。ちゃんと膝に両手を載せて、にっこり笑う。

「まあ、百年目の約束の日まではまだあと十日ほどある」

「十日!? ちょっと、すぐじゃない!」

十日後は何曜の何日だっけと数える前で、幼女は続ける。

「ゆっくり、人間やめるかこの家を更に没落させるか、考えることだ」

「んなことゆっくりできるかーっ!」

思わず床を叩き、受けた思いがけない痛みを散らすためその手をぶんぶん振る。ころころととても愛らしい笑い方をした幼女は、ふと気づいたように真面目な顔になった。

「そうそう、名乗るのを忘れておった。わらわはべにこと申す。くれないに、子どもの子じゃ。今後ともよろしくの」

言って外国人のように差し出してきた手を、ぺちんと払いのける。直後にさっきの守り神という言葉思い出し、頭の中で秤を揺らした後その手をゆっくりと握った。

「よろ、しっ! あいだだだだっ」

跳ね退けてこの家に災いを招かれたらやっかいだと、そう思っ握手に応えたのだが、心配するまでもなくさっきのお返しは自分への攻撃としてやって来た。

見た目とまったく合っていない握力に骨がきしみ、悲鳴を上げると幼女は袖で口元を覆い隠しほほと笑う。

「再びないがしろにしたら、こんなものじゃないぞえ」

その顔が、美子には能面のごとく作られたように見えた。

……お父さんお母さん、まだ飛行機は空の上でしょうか。日本の

娘は初日から留守番が嫌になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1652s/>

ハッピーウェディング

2011年4月3日01時35分発行